

播種性クリプトコックス症について

日本感染症学会

宮崎 義継

播種性※クリプトコックス症の主な原因真菌

※「播種性」は病変が多臓器にわたっている場合に使用される。

クリプトコックス属真菌

- ・クリプトコックス属は健常者に病気を起こす病原性の高い真菌。
- ・HIV感染など細胞性免疫能低下の宿主に好発し、重篤な症状を呈す。
- ・ポリエン系やアゾール系の抗真菌薬が有効だが健常者でも長期の治療が必要。

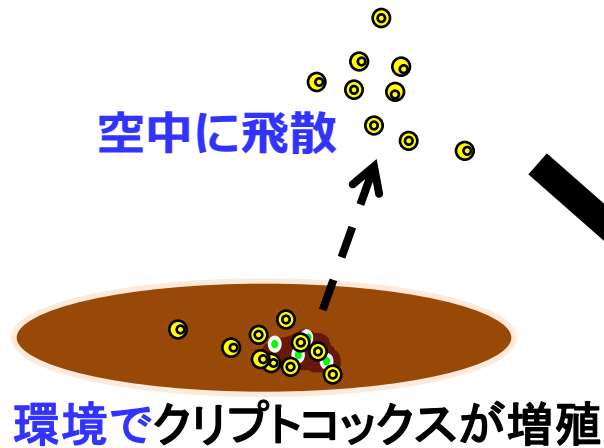
●クリプトコックス・ネオフォルマンس

- ・わが国は殆どがネオフォルマンス感染と理解されていた。
全世界的に分布。
- ・感染源＝ハト、ニワトリ等の糞で発育しやすい。
- ・脳髄膜炎を合併しやすく、免疫不全の患者での死亡率は高い。

●クリプトコックス・ガッティ

- ・オーストラリアや、熱帯、亜熱帯地域に生息する、
地域特異性のある病原体で、従来はわが国では輸入例との理解。
(特定種のユーカリ等の樹木に生息)
- ・British Columbia (Canada)でアウトブレイク
- ・健常人に多く発病、高病原性では致命率も高い(-20%)。

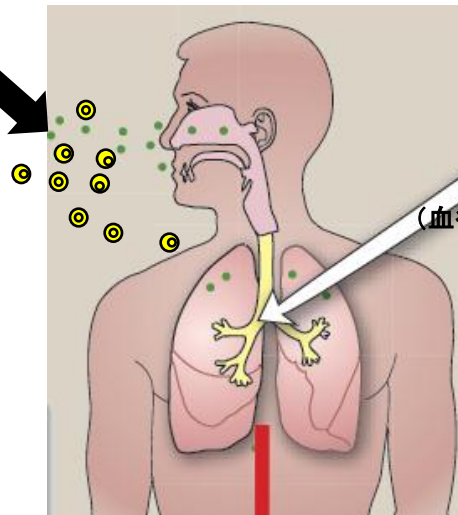
クリプトコックスの感染経路と病態



クリプトコックスが増殖しやすい環境として、鳥類の堆積糞、ユーカリの木などが知られるが、**感染源は不明な場合も多い。**



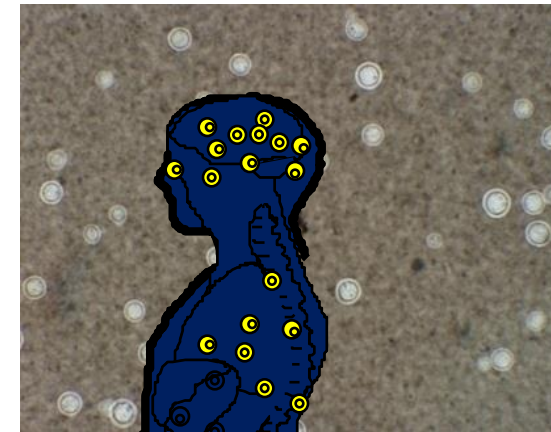
鳥(鳩)糞



経気道感染による、**肺クリプトコックス症**

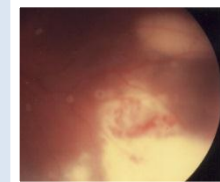
(血行性、リンパ行性)

**全身に
播種**



**脳髄膜炎など
播種性病変**

眼内炎では失明



クリプトコックス脳髄膜炎の頻度 (JANIS検査部報告)

わが国におけるクリプトコックス脳髄膜炎の頻度は、200～400例/年程度と推計される。

肺炎球菌性脳髄膜炎とほぼ同数である。

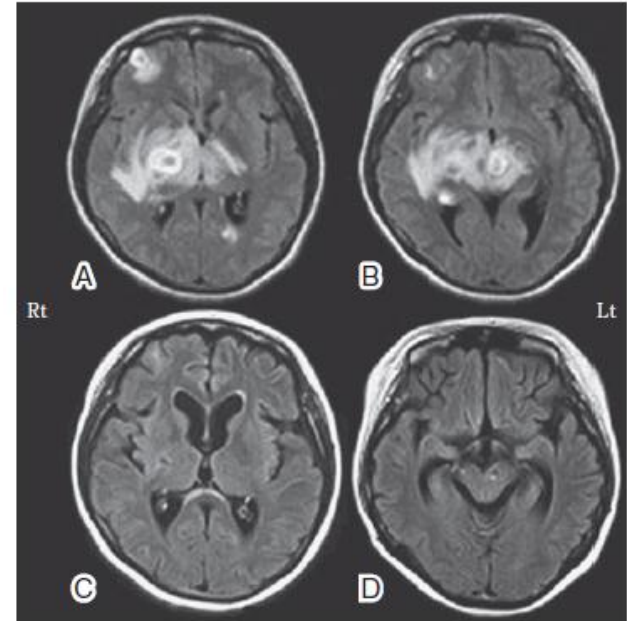
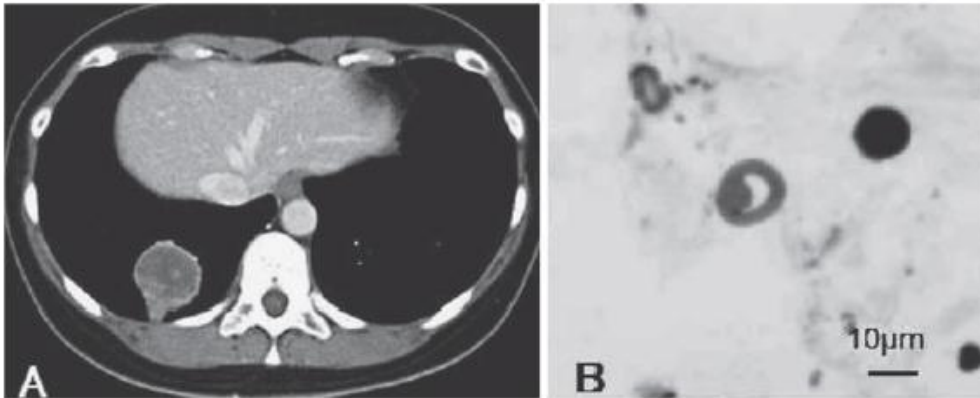
年	頻度 (%)	全髄液培養陽性数
2001	2	1308
2003	2	
2005	2	1196
2007	3.5	1044
2009	2.4	4504
2010	1.9	
2011	2.8	4348
2012	3.4	4523

わが国の播種性クリプトコックスの例

脳室内抗真菌薬投与が奏効した *Cryptococcus gattii* による脳および肺

クリプトコッカス症の1例

(臨床神経 52: 166-170, 2012)

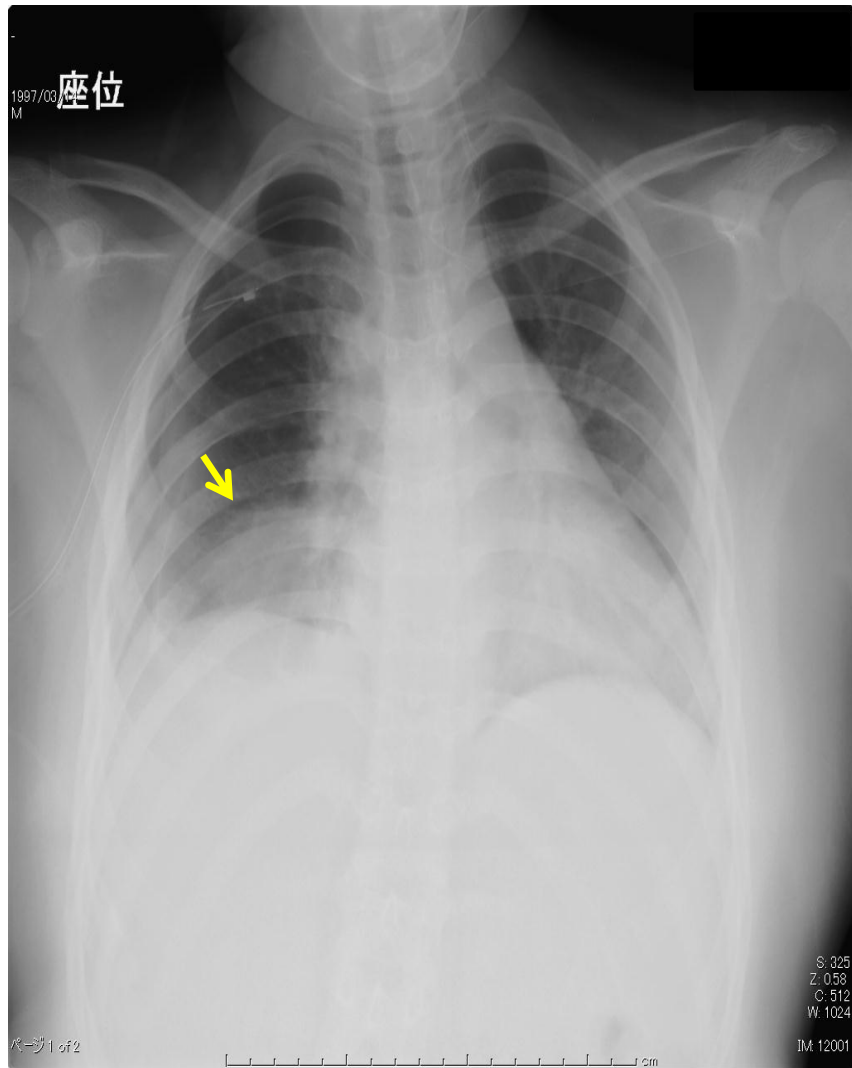


- ガッティ感染例はネオフォルマンス感染例より、頭蓋内病変を形成しやすい傾向がある。
- ガッティ感染症は、通常の抗真菌薬療法が無効で、特殊な治療選択も考慮。
- 国内でアウトブレイク事例が経験されるが、調査の法的根拠が無い。

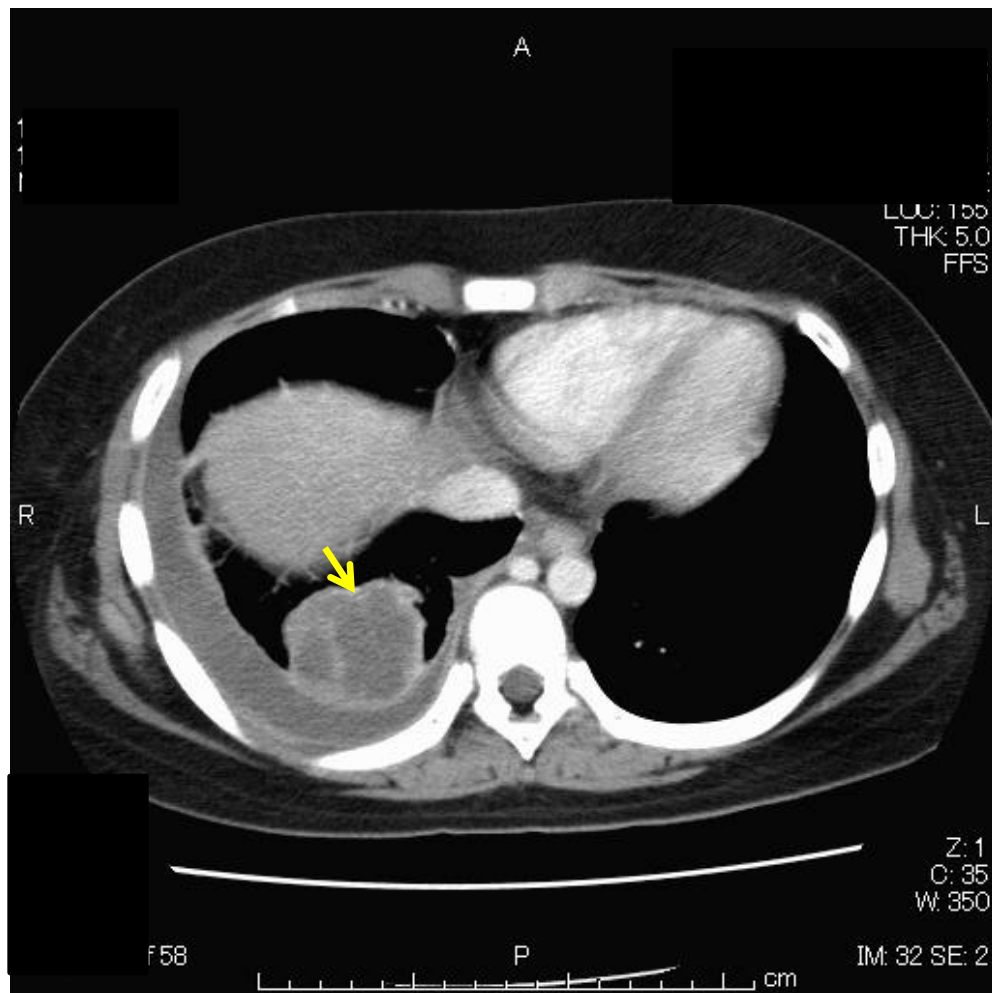
小児での*C. gattii*感染症(国内感染例)

入院時画像所見

胸部Xp



胸部CT



発生状況の把握が必要な理由

1. 発生動向を把握することにより、以下の対応が可能。
 1. 環境中の感染源を特定し除去することで、発生・まん延予防が可能となる。
 2. 居住地で流行があれば、エイズ等のハイリスク患者では化学予防が可能となる。
 3. 発生状況を情報提供することにより、地域における医師の診断に寄与する。
 4. 患者の渡航歴等を分析することで、適宜海外渡航者等へ情報提供できる。
2. 発生状況の正確な把握により症例情報の集積が可能となり、疾病に対する医療の向上につながる。
 1. わが国における疾病の疫学情報の公表が、認知度を高め、疾病の見逃しを無くす。
 2. 効果的な治療法の知見が蓄積され、医療に還元できる。⁷